

## 薪と水の利用に関連した地域社会のヒューマン・セキュリティ

小林繁男

ヒューマン・セキュリティは UN に 1994 年に支持され始めた。ヒューマン・セキュリティの目的は、国際的動きに呼応する国内の生態資源（特に貧困と環境状況の悪化）に着目し、研究することである。今回のレクチャーでは、ラオスとギニアの貨幣経済に頼らない地域社会での必要不可欠な生活エネルギーや水に注目している。ラオスでは Nam Ha 村と Luang Nam Tha 市で、ギニアでは、33 村、10 都市で調査を行い、2ヶ国の村と都市の状況について説明している。

ラオスの Nam Ha 村では、森林の木々を伐採するだけでなく、既に焼き畑にした土地にある木々を利用し、(乾燥しており、燃料にしやすい) 薪や木炭として使用する。木炭は肥料となる。川を流れる水は飲料水には利用されず、人々は湧水を飲料とする。しかし、森林破壊により山の環境が変化し、近い将来湧き水不足に見舞われることが懸念されている。

Nam Ha 村の所得は 308 ドルで、収入源は①米、②NTFP (Non Timber Forest Product) である。Luang Nam Tha 市の所得は 2228 ドルである。支出においては、Nam Ha 村は 2,234,142kip で、Luang Nam Tha 市では 12,307,326kip であり、約 6 倍近い。内訳としては、Nam Ha 村は①服、②住居、③食費の順に多く、水道代は無料であり、光熱費にかかる費用も少ない。しかし、村の所得はほぼ支出と同額であり、村の貯蓄がないのに比べ、都市は 770 万 kip 貯蓄可能である。また、都市の光熱費、水道代の支出は村の収入の 62% に当たり、村にこれらが更に導入された場合、対処することは困難になるだろう。焼き畑の再生可能な周期は 15 年であるが、人間の森林伐採や焼き畑のペースが早まると、湧き水も枯れ、人々は移動を強いられる。しかし、実際は移住地を探すことは困難な状態にある。

ギニアでは、ラオス同様木材を燃料と木炭として利用する。村と都市を比較すると、都市に住む人々の方が所得は高いが、村人の中にも裕福な者はおり、村から都市部へ移住した者は高収入の仕事に就けることが困難なため、村の者より貧しい場合もある。

世界的に薪や木炭の消費量を見ると、東南アジアとアフリカでの薪の、南米とアフリカで木炭の消費量が増加している。これら 2 つの資源は今後も重要なことは明白だが、森林保護は土地利用に最も貢献するので、生態的特徴をふまえた上での資源の有効的な利用法について検討する必要がある。私たちは国家の所有物としての資源ではなく、地域レベルでの資源の利用に着目し、ヒューマン・セキュリティについて考えるべきである。

(記録：平田 生子)